

お 老いにも“初々しく”

そのだ ひさこ

昨今の命や人権の地すべり状況。子どもへの虐待(死)、相次ぐ殺傷事件、なかでも通学バスを待つ子どもたちや見送りの親、19人を次々に襲い包丁で命を奪った事件、たてつづけの交通事故による死亡事件など。言葉なく…:胸が痛い。人はどんなふうにも変わる。それができる危うい生きものなのだ、今さらながら、そら恐ろしくなる。

虐待事件は、今も後を絶たない。記憶に新しいのが、仕事場ではまじめ、誠実といわれていた父親が、子どもに虐待をくりかえし死に至らしめた事件。母親も夫から自分がやられるのが怖くて、虐待に協力する。学校への本人の訴えも功をそうすることはなかった。

どういふ人生を選ぶかはまったく自由だが、人は出会い、愛しい、結婚し、命をやどし、産み育てるといふ選択肢もある。虐待のケースの場合、その虐待をくりかえした本人自身が、子どもものころ

に虐待を受けていたという報道もあつたりする。自分の幼・小児期の身体に刻印された記憶が成人し、社会生活を営むなかで、さまざまな原因で追いつめられた時、自然に身近な家族にでてしまうのだろうか。人間にはどんな特効薬もないことを胸深く、痛く、実感する。

私はすでに、父も母も兄も身近な血縁はすべてこの世にいない。帰るふる里もなく、母とすごした家も解体した。学校も過疎で無くなった。訳あって、私は父と母と兄と私の四人の苗字がみんな違うという面白い(!?)人生。母はこんなにやくの行商や季節料理人などで働き続け、60歳で半身不随になり12年の介護。私は母の年を超えてまだ生きている。だが、小学生の頃、母の同居の男から振るわれた暴力は今も記憶にある。一夫一婦父権制社会の意識が根深く残る戦後の日本社会のなかで、周りの母や私へのいたぶりやさげす

みの眼差しは身に痛く刺さった。だが、反撃する力は母も私にも無く、気づけば、やられたらやり返すという、気持ちの反撃で心は武装しトゲだらけ。大学進学は故郷からの脱出といたぶりへ反撃のため。40年間故郷には帰らなかつた。それからの数十年、幾人かの方々の出会いは私を変えた。勝つ、というのはいふ返すことではなく、人間の中身が豊かになること。だと身をもって教えて下さった方のお一人が、生涯、部落解放運動に身を賭した井元麟之(元全国水平社書記局長)さん。さらに、売られていった「からゆきさん」のこと等を書いて、人がどんなに大切に温かいものかを著して下さった作家の森崎和江さん。このよな方々に影響を受け、今は自分を突らすことに貪欲である。老いにも初々しく。

●TUNAGU IIとは 人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所理事、九州大谷短期大学講師)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

●問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当